

バーンサイド・ゴージ・コミュニティ・アソシエーション (コミュニティセンター)

レポート：松本百子

★概要

閑静な住宅街の中、公園内の緑豊かな場所に 2007 年 9 月にリニューアルオープンしたコミュニティセンター。

日本でいう公民館や児童館のような施設で、ビクトリア市内に同じような施設が 8 つある。建設は組織の寄付によるもので、運営は政府からの費用と、利用料から賄っている。「家族のために、家族みんなが使える」ということと、「環境に優しいもので作る」という 2 本柱で運営をおこなっている。

建物は屋根が庭になっており、物を買って増やすのではなく、ある物でということ、庭の草花も目の前の原っぱから苗を持ってきて作っていた。

★さまざまな使い方

アクティブルーム、キッチンルーム、ファミリールーム、語学やヨガを学ぶ部屋、ユース(中高生)ルーム、保育園が設置されている。

特に興味深かったのが、10 代(10 歳～18 歳)の子どもたちのための部屋で、非行を減らすことと、地域の中で顔見知りになり助け合うことを目的としているそうだ。

中には、シアターの部屋と、卓球台やビリヤード、キッチン、ソファなどがある部屋に分かれていた。月～水は 18 時半まで、木・金は 21 時まで空いている。

普段の利用は 10 名くらいで、休み中は 25 名くらいの利用があるとのことであった。ユースルームの前には、5 月のカレンダーが貼ってあり、プログラムが記入されていた。



＜ここは2階部分で屋根になっている＞

★プログラムも豊富に準備

夕飯を食べたり、女の先生、男の先生が部屋に入って話を出来るなど、週に 5 回づつプログラムがあった。春休みや夏休みには、特別なイベントとしてカヤックで川を渡るなどをしている。

ほかに、料理をする部屋があり、ファミリーディナーというイベントではフードバンク(食べ物の寄付)で集まった食材で夕飯を作り、参加した地域の人に配布している、100 人くらい集まるそうだ。

毎日、各地のコミュニティセンターで朝昼晩の食事の提供をしており、地域の人が食べ物に困ることはないように感じた。

★保育園の併設

家族みんなが使えるということで、3 歳～5 歳の子どもが通うプレスクール(保育園)が併設されていた。

一部屋の中に、おままごとのスペース、勉強のスペース、工作のスペースなどと 6 箇所

に分かれており、自分の好きなことを自分で選んで遊ぶという形式で保育をおこなっている。学校に行く準備として、1時間椅子に座って勉強できるよう訓練している姿が見られた。

プレスクール(保育園)は、午前の3時間のみ開園しており10時半にスナックタイムがある。家庭から持参してくるが、ジュースやクッキー、ケーキなどは禁止している。フルーツや野菜がほとんどであった。

★いろいろな学び合い

5月は「海と川」について勉強中で、壁面には魚の写真や川の写真などが貼ってあった。子どもたちは、自由に過ごしており、絵を描いている子や、勉強をしている子、おままごとをしている子など、同じ時間に一部屋で様々な遊びを展開していた。

★資格の違い

プレスクールの先生に話を聞くと、先生は2年間緊急時の勉強をし、アルバータ州で保育士免許を持っていたが、ビクトリア(ブリティッシュ・コロンビア州)で免許を取り直したとのこと。

カナダでは、州ごとに資格が分かれているようだ。また、スクールバスの免許も持っており、資格がたくさんあったほうが雇用されやすいと話していた。

★グローバルな視点を求められる先生

現在、先住民の子どもが2名いるため、先住民の文化を勉強している。また、「カナダは移民の国であり2カ国語話せるのは当たり前で、英語しか話せない先生では対応しきれない。

グローバルな視点を持って全文化を受け入れられる先生が求められている。」と話していたのが印象的であった。

★日本との違いと似ていること

日本では、日本の文化を伝えることや日本語を話すことが当たり前で、そこに大きな違いを感じた。

先生は、ニュースレターを通して、保育内容などを保護者に伝えている。子どもだけでなく保護者もそれを見て、育っていくことを最終的な目的としていると話していた。

自閉症やADHDについて「増えているのか、こちらが判断できるようになって増えているように感じるのか、わからない。」と話しており、そこは日本と同じだと感じた。カナダでは、自閉症への意識が高く、親が専門機関につれていくことも多いとのこと。問題があれば支援の人が、入ってくれ補助が受けられるとのことであった。

★文化の違いを感じる

助け合う、寄付をするという考えが小さな頃から根づいており、コミュニティーセンターはその役割を地域の中でよく果たしていると感じた。地域の人が顔見知りになり、さらには家族や低所得者に寄付などを通して食事の提供をしたり、地域内で困っている人をみんなで助けていこうという意識の高さに驚き、文化の違いを感じた。

